

とりたて詞の階層性について
- 動詞句及びスコープを手がかりとして -

もぎ としのぶ
茂木 俊伸 (筑波大学大学院)

とりたて詞の階層性について

- 動詞句及びスコープを手がかりとして -

もぎ としのぶ
茂木 俊伸 (筑波大学大学院)†

1. とりたて詞の階層性

「とりたて詞」とは、従来「係助詞」「副助詞」として分類されてきた語群の一部を、一定の統語・意味両面の特徴を共有するものとしてカテゴリー化したものである¹。しかし、とりたて詞に含まれる個々の語を見た場合、その統語論的特徴は一樣ではないことが指摘されている。

このことは、例えば、沼田(1989)における(1)のようなテストから窺うことができる([_A...]は南(1974)の従属句階層モデルにおけるA段階の句であることを示す)

(1) 各段階の従属句中の要素となりうるかどうか。

- a. 彼女は[_A顔だけこちらへ向けながら]、軽く挨拶した。 (沼田(1989), p.162, (6a))
b.?? [_A配布資料くらい見ながら]、発表を聴く。 (同, p.171, (51a))

沼田(1989)は、(1)のような一定の構造的単位(具体的には句/節)における分布の差から、とりたて詞が、カテゴリーとしては(南(1974)のモデルの)B段階を中心としつつも、個々の語についてはそれぞれ異なる一定の幅を持って階層構造上に分布することを指摘している。

同様の問題に関して、野田(1995)は、沼田(1989)の方法論を不十分なものとし、(2)のような三つの基準から個々のとりたて詞が機能する文階層を認定している。

- (2) (とりたて詞が) 1) どんな述語と呼応するか
2) どんな成分をとりたてるか
3) どんな従属節の内部に入るか (野田(1995), p.8)

野田(1995)は、このうちの1)を最も重要な基準としつつ、これで捉えきれないとりたて詞は残りの基準を併用する形で分析しているが、この点で、逆にこの方法論の一貫性に疑問が残る。

本発表における「とりたて詞の階層性」とは、とりたて詞という一つのカテゴリーを設定し、同時に個々のとりたて詞を文の階層構造に位置付けたときに見えてくる、その階層上の広がりのあるさまを指す。上の二つの先行研究からは、この「階層性」の分析の精密化には複数の基準を考慮することが望まれる一方で、これにより分析の一貫性に問題が生じる危険性があるというジレンマを読み取ることができる。したがって、この問題を扱う上で重要になるのは、より幅広く現象を捉えられ、かつ従来の方法論²と何らかの形で関連付けられる指標を探していくことであると言える。

本発表では、この一つの指標として、「動詞句」という単位と「スコープ(意味的作用域)」³の概念に着目した分析方法を提案する。

† e-mail: tmogi@lingua.tsukuba.ac.jp

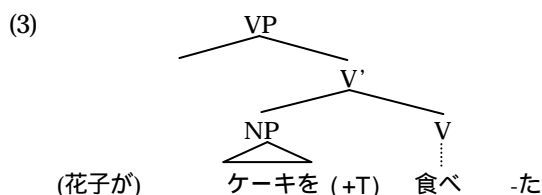
¹ 「とりたて詞」の範囲、定義等に関しては沼田(1986)に拠る。

² (2)に挙げられているものの他に、とりたて詞と格助詞、とりたて詞と述語、及びとりたて詞相互等の承接関係も注目すべき問題である(cf. 近藤(1995), 宮地(1999))。この点については、3節でその一部を扱う。

³ 本発表では「スコープ」を、「当該の要素が意味的に作用を及ぼしうる範囲」という意味で用いる。

2. 動詞句におけるとりたて詞の生起

まず、議論の前提として、動詞句(VP)の構造をごく簡単な形で次の(3)のように考えておく(ただし、多くの議論を要する主語位置の検討は省略する)。



さて、(3)において「T」で示したのが、例えば「花子がケーキだけを食べた」「花子がケーキも食べた」において、(非主語)名詞句をとりたてる「だけ」「も」に関して想定される位置である。

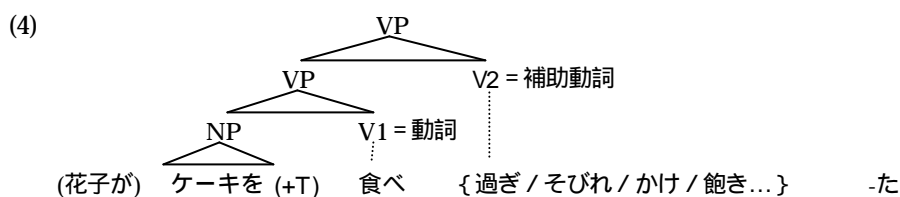
しかし、先に(1)で見たような個々のとりたて詞の振る舞いの差異を考慮に入れると、どのとりたて詞も一律に同じ位置(例えば、(3)の T)にあるものとして考えてよいのか、という素朴な疑問が浮かぶ。つまり、先に(1)で見られたような、ある構造的単位の内部に特定のとりたて詞が構造的に収まらない、という現象が、(3)のような動詞句でも観察される可能性がある。

本発表では、とりたて詞のうち、特定の文末要素との呼応の制約(cf. 野田(1995), Sano(1999))がなく、これまでそれほど明示的な形での特徴付けがなされてこなかった「だけ」「まで」「は」「も」「さえ」⁴を例に、この点を検証していきたい。

以下、具体的な現象として、「動詞句」という単位に密接に関わる、複合動詞構造(2.1)、動詞連用形のとりたて(2.2)、否定文(2.3)という三種類の構造について見ていく。

2.1 複合動詞 ~ 補助動詞のスコープ ~

いわゆる「統語的複合動詞」(由本(1997)他)の統語構造は、動詞句の中にもう一つ動詞句を埋め込んだ、(4)のような形が想定される⁵。



このとき、上位の動詞句にある補助動詞(V2)が、下位の動詞句内のとりたて詞(T)をそのスコープに含むことができるかどうか、テストしてみる。とりたて詞が下位の動詞句に構造的に収まるのであれば、(構造的に上の要素がそれよりも下の要素をそのスコープに含むという仮定の下で)V2がTをそのスコープに含んだ解釈が可能であるはずである。

⁴ ここで扱う「は」はいわゆる「対比」の「は」。「も」は「単純他者肯定」(沼田(1986))の「も₁」である。

⁵ 由本(1997)は、統語的複合動詞の3タイプ(非対格タイプ(例:「~過ぎる」)、VPタイプ(例:「~そびれる」)、V'タイプ(例:「~終える」))のうち、V'タイプのV2のスコープに副詞要素が含まれにくいことを指摘している(例:「彼は[速達で書類を出し]忘れた」)。とりたて詞(「だけ」)の場合も、傾向としてV2に含まれる解釈の許容度がやや低い。議論の便宜上、ここではV'タイプの例は扱っていない。

このテストの結果、「だけ」はこのようなスコープ解釈 ($T < V2$) が可能であるが、それ以外のとりたて詞に関してはこのような解釈を非常に許容しにくいことが分かる。

- (5) a. 花子は、 $[_{V2}$ ケーキだけ(を)食べ]過ぎた。
 [ダケ($T < V2$): (他の食べ物には見向きもせず、) ケーキだけを(ひたすら)食べる、ということ
 を(何度も/継続して)し過ぎた(ために白い目で見られた。)]
 cf. [ダケ $>V2$): (色々な物を食べたが、そのうち) ケーキだけを、食べ過ぎた。]
- b. 花子は、 $[_{V2}$ ケーキだけ(を)食べ]そびれた。 「ケーキだけ食べる」ことに失敗した。
- (6) a.??花子は、 $[_{V2}$ ケーキも食べ]そびれた。
 [モ($T < V2$): (他の物を食べるついでに) ケーキにも手を伸ばす、ということをしそびれた。]
 cf. [モ $>V2$): (色々な物を食べそびれたが、) ケーキも、食べそびれた(ものに含まれる。)]
- b.??花子は、 $[_{V2}$ ケーキまで食べ]過ぎた。 「他のものに加えケーキをも食べる」ことをし過ぎた。
 c. *花子は、 $[_{V2}$ ケーキは食べ]かけた。 「他のものとはともかくケーキを食べる」ことをしかけた。
 d. *花子は、 $[_{V2}$ ケーキさえ食べ]飽きた。 「他のものに加えケーキをも食べる」ことに飽きた。

(5)(6)の観察から、考察対象である五つのとりたて詞に関して、次のような区分が可能である。

- (7) だけ | まで・は・さえ・も

補助動詞のスコープ解釈から得られたこの区分は、「だけ」は(4)の構造において下位の動詞句内に収まるが、それ以外のとりたて詞はこれに収まらない、ということを示すものである。

このように、ある要素について、(非主語)名詞句に後接するとりたて詞をそのスコープ内に含めた解釈が可能かどうかを見ることで、統語構造上の特徴に基づくとりたて詞の区分ができる。

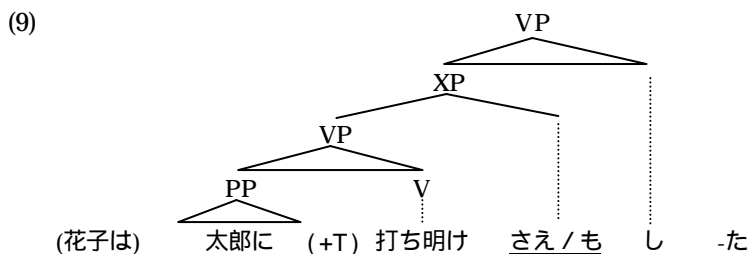
2.2 「さえ」焦点化テスト ~ 「さえ」「も」のスコープ~

Koizumi(1993)や佐藤(1996)(1998)は、従属節の統語構造上の位置に関して、「さえ」焦点化テスト」を一つの根拠とした分析を行っている。このテストは、主節動詞を「さえ」でとりたて、この「さえ」の焦点に当該の従属節が含まれる可能性を見ることによって、その従属節が動詞句内にあるものかどうかを確かめるものである。

- (8) a. 花子は、 $<_{サエ}$ テレビを見ながらダイエットに励み>さえした。
 b. *次郎は、 $<_{サエ}$ 魚介類が嫌いだったが寿司を頼み>さえした。

このテストの結果において、「さえ」によって当該の構成素((8)で言えば従属節)が焦点化可能」すなわち「「さえ」のスコープに当該の構成素が含まれる」ということは、本発表で言う「当該の構成素が動詞句に構造的に収まっている」ことを指す。

この「さえ」焦点化テストに代表される、動詞句をとりたてた形の構造に関しては、これまで概略次のように想定されてきた(澤田(1993)他)⁶。



そこで、このときどのとりにて詞がこの構造の T 位置（下位の VP 内）に現れうるのか、動詞句をとりたてている（(9)の下線部の）とりたて詞（(10)では「も」⁷）のスコープ解釈から見てみる。

- (10) a. 花子は、 \langle_{ϵ} 太郎にだけそのことを打ち明け>もした。
 [ダケ(T)<モ]：花子は、太郎にのみそのことを打ち明ける、という（誤解を招きかねない）ことも、（次郎への当てつけとして）した。
- cf. [ダケ>モ]：花子は、太郎（ただ一人）に対してのみ、そのことを打ち明けることも（解決の手助けを頼むことも）した。
- b. ??花子は、 \langle_{ϵ} 太郎にさえそのことを打ち明け>もした。
 [サエ(T)<モ]：（不安になった）花子は、（それほど親しくない）太郎にさえそのことを打ち明ける、ということも、（次郎に相談することと同時に）した。
- cf. [サエ>モ]：花子は、（それほど親しくない）太郎に対してさえ、そのことを打ち明けるということも（解決の手助けを頼むことも）した。
- c. *花子は、 \langle_{ϵ} 太郎にはそのことを打ち明け>もした。
 花子は（一応）太郎に対してはそのことを打ち明ける、ということも、（次郎に報告することと同時に）した。
- d. 花子は、 \langle_{ϵ} 太郎にまでそのことを打ち明け>もした。
 花子は（それほど親しくない）太郎にまでそのことを打ち明ける、ということも、（次郎に相談することと同時に）した。

この結果、「さえ」「は」（及び「も」）が、動詞句全体をとりたてているとりたて詞のスコープに含まれない、すなわち動詞句に収まらないことが分かる⁸。逆に、「だけ」「まで」は、動詞句内に問題なく収まることが分かる。

以上の観察から得られるとりたて詞の区分は次のようなものである。

- (11) だけ・まで | は・さえ・も

⁶ (9)の「XP」は、とりたて詞が付加構造を構成する要素であることを示す。

⁷ ここで「さえ」ではなく「も」の例を挙げたのは、「さえ」よりも「も」の方が例文の意味解釈上の制限が少ないためである（cf. 有田(1999)）。テストの結果自体は、「さえ」の場合とほとんど変わらない。

⁸ 動詞句に後接するとりたて詞／動詞句内のとりたて詞が「も」「さえ」（あるいは「さえ」「も」、及び同じとりたて詞同士）の組み合わせの場合、他の例に比べて許容度が高く感じられるかもしれない。しかし、これは二つのとりたて詞の意味の近接性に起因した例外的な現象であると考えられる。

(i) a. ??花子は \langle_{ϵ} 太郎にさえそのことを打ち明け>もした。（= (10b)）

b. *花子は \langle_{ϵ} 太郎にさえそのことを打ち明け>はした。

さて、ここで、当該の構成素が「動詞句に収まらない」という観察が何を意味するのかを考えてみる。先の Koizumi(1993)の従属節の分析の場合、これは「当該の従属節が構造上、動詞句よりも上の階層に存在する」ということを指した。

しかし、ここまで見てきたとりたて詞の場合、このような単純な記述はできないと思われる。ここまでの例において T 位置のとりたて詞によってとりたてられていた要素（非主語名詞句）は、本来的には文の中心的な構成要素として動詞句に含まれるものであるが、この要素が「さえ」「は」等のとりたて詞の存在によって動詞句内に収まらなくなってしまうことが観察されるためである。したがって、「あるとりたて詞（がとりたてる要素）が動詞句に収まらない」という上の現象を記述するためには、そのとりたて詞の後接によって発生する、ある種の「繰り上げ」⁹のプロセスの存在を想定する必要がある。

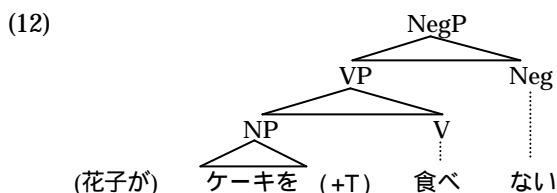
そして先の(11)から、動詞句に収まらない「さえ」「も」「は」が動詞句外への繰り上げを必須的に伴うとりたて詞であるのに対し、そのまま動詞句に収まることが可能な「だけ」「まで」はこのようなプロセスが少なくとも必須的ではないとりたて詞であると言える。

このように、本発表の考察対象である五つのとりたて詞は、とりたてる対象を動詞句よりも上の階層に繰り上げるタイプのもの、動詞句外への義務的な繰り上げを伴わないタイプのもの、と大きく分けられることになる¹⁰。結果として、前者のタイプの「さえ」「も」「は」は動詞句よりも上の階層に、後者のタイプの「だけ」「まで」は動詞句内に位置する要素であると考えられる¹¹。

2.3 否定文 ~ 否定のスコープ ~

とりたて詞には、意味解釈上、否定のスコープの中に含まれうる（N(arrow)スコープをとる）ものと、含まれない（W(ide)スコープをとる）ものがある。統語論的に見れば、とりたて詞が構造的に否定辞よりも上位にある場合がWスコープ、下位にある場合がNスコープということになる。

ここで、否定文のある種の埋め込み構造として考えれば、概略次の(12)のような構造を想定することができる¹²。



⁹ ただし、この用語は記述のための概念として用いるもので、具体的な原理に従った移動を意図したものではない。

¹⁰ ここからは「係助詞」「副助詞」の品詞論的区別が想起されるが、個々の語に関して厳密な検討が必要である。例えば、2.1節の現象から「まで」は動詞句内のレベルで繰り上がると考えられ、この点で「だけ」とは異なる。

また、「なぜ繰り上げが起こるのか」という根本的な問題は、いわゆる「呼応」あるいは「一致」現象によって動機付けられることができると思われる（cf. 野田(1995), Sano(1999)）。すなわち、「しか」等と異なりその相手を明示的に示すことが困難であるが、例えば「さえ」は動詞句よりも上の階層の要素と、「まで」は動詞句内の一定の要素と、「呼応」あるいは「一致」する特徴を持つと考えられる。なお、「だけ」はこのような指定に関して最も中立的であり、一般の数量詞に近い性質を持つと言える。

¹¹ スコープ解釈の曖昧性から、「まで」「だけ」に関して繰り上げを起こすものと起こさないものの二種類を想定することも可能であるが、ここでは諸現象との関連から、「だけ」「まで」は「さえ」のような動詞句外への繰り上げを起こさないものとして捉える。すなわち、これらのスコープ解釈は統語構造の段階では決定されず、統語・意味両レベルのインターフェイスとなるレベル（生成文法における LF(Logical Form)に相当）の構造において決定されると考えておく。

¹² (12)は、佐藤(1998)における否定文の構造を参考にしたものである。

これまでの二つの構造と同様の形で、否定辞(Neg)のスコープに動詞句(VP)内のとりたて詞(T)を含んだ解釈が可能かどうかを、各とりたて詞に関して見てみる。

- (13) a. 花子は、 $[_{VP}$ ケーキだけ(を)食べ]なかった。
 [ダケ(T)<Neg]:(他の物には見向きもせず)に)ケーキだけ食べる、ということはしなかった。
 cf. [ダケ>Neg]:(いろいろな物を食べたが、唯一)ケーキだけ、食べなかった。
- b. *花子は、 $[_{VP}$ ケーキも食べ]なかった。
 [モ(T)<Neg]:(他の物に加え、欲張って)ケーキも食べる、ということしなかった。
 cf. [モ>Neg]:(食べなかった物はいろいろあるが、)ケーキも、食べなかった。
- c. 花子は、 $[_{VP}$ ケーキまで食べ]なかった。 「ケーキまで食べる」ということはしなかった。
 d. *花子は、 $[_{VP}$ ケーキは食べ]なかった。 「ケーキは食べる」ということはしなかった。
 e. *花子は、 $[_{VP}$ ケーキさえ食べ]なかった。 「ケーキさえ食べる」ということはしなかった。

(13)から、動詞句内に収まるとりたて詞は、「だけ」「まで」に限られることが分かる。残りの「は」「も」「さえ」は動詞句に収まらないが、特に「も」「さえ」は、意味解釈上Wスコープのみをとることから、否定辞句(NegP)よりも上の階層に繰り上がると推測される。

ここで問題になるのが、多くの先行研究において「否定の焦点マーカー」とされてきた「は」の扱いである。否定の焦点をマークする以上、「は」は否定のスコープに含まれると考えられるが、(13d)から明らかのように、これは少なくとも動詞句の中には含まれない。

この問題に関して、(14)のような数量詞の特性を利用した(15)(16)のようなテストを試してみる。(14)に示したように、a文の数量詞「すべて」は部分否定可能(=否定のスコープ内に生起可能)な、b文の「いくつか」は部分否定不可能(=同、生起不可能)な要素である(cf. 加賀(1997))

- (14) a. < $_{Neg}$ すべての問題を解か>なかった。
 b. *< $_{Neg}$ いくつかの問題を解か>なかった。
- (15) a. < $_{サエ}$ すべての問題を解き>さえしなかった。
 b. < $_{サエ}$ いくつかの問題を解き>さえしなかった。
- (16) a. < $_{ハ}$ すべての問題を解き>はしなかった。
 b. ??< $_{ハ}$ いくつかの問題を解き>はしなかった。

(14)の数量詞の特性から(15b)と(16b)の許容度の差を考えると、「いくつか」を含んだ動詞句のとりたての読みを許す「さえ」は否定のスコープ外、これを許さない「は」は否定のスコープ内にあることが分かる。ここから、「は」は、「動詞句よりも上」かつ「否定辞句以下」の位置に繰り上がるとりたて詞であると考えられる。

ここまでの観察をまとめると、次のような区分が得られる。

- (17) だけ・まで | は | さえ・も

3. まとめと関連する問題

以上の三つの現象の観察から得られたとりたて詞の区分は、次のようなものである。

(18) だけ | まで | は | さえ・も

「だけ」:「まで」「は」「さえ」「も」...補助動詞のスコープテスト (2.1)

「だけ」「まで」:「は」「さえ」「も」...「さえ」焦点化テスト (2.2), 否定のスコープテスト (2.3)

「は」:「さえ」「も」...否定文における数量詞テスト (2.3)

この(18)の区分は、それぞれのとりたて詞の文構造上の位置に対応しており、文の「階層」に並行したものである。

動詞句を一つの境界とするならば、「だけ」「まで」はそれよりも下の階層に、「は」「さえ」「も」はそれよりも上の階層に位置する。さらに、動詞句内の「だけ」と「まで」の区分、動詞句外の「は」と「さえ」「も」の区分は、それぞれのとりたて詞の「階層」への広がりのあり方をより細かな形で反映したものであると言える。

最後に、関連する問題として、従来の研究においてとりたて詞の「階層性」を考える際に重要視されてきた(注2参照) とりたて詞の承接の問題に触れておきたい。

まず、とりたて詞相互の承接関係に関しては、二つのとりたて詞の意味が相互に矛盾しない組み合わせであることを前提とした上で、(18)の階層関係からある程度予測することができる。すなわち、承接順は階層順に従う。

(19) だけは、*はだけ、*さえは、までも

次に、述語連用形との承接であるが、これを問題なく許すのは「は」以降のとりたて詞(18)における「は」「さえ」「も」であって、「だけ」「まで」についてはこれを奇妙に感じる話者が多い。この点に関しては、「だけ」「まで」を動詞句の内部に位置する要素と考えることにより、この承接の困難さを捉えることが可能である。

これらの承接の問題は、(18)のようなとりたて詞の階層性という道具立てのみで記述できるものではないが、以上のように両者の関係性のある程度の範囲まで指摘することができる¹³。

本発表では、「動詞句」という構造的単位に関わる構造において、ある要素の「スコープ」ととりたて詞との意味解釈上の関係に着目し、文構造から見たとりたて詞の「階層性」(階層的な広がり)の一面を捉えることを試みた。

¹³ 従来指摘されてきたとりたて詞と格助詞の承接についても、現象としてはここでの考察と一定の関連性を持つ。

(i) a.名詞+格助詞+とりたて詞 (例:「太郎にだけ」「太郎にも」)

b.名詞+とりたて詞+格助詞 (例:「太郎だけに」「*太郎もに」)

本発表の考察対象のうち、「は」「も」「さえ」のグループは(ia)のパターンのみを許容するが、「だけ」「まで」のグループは(ia,b)両方のパターンが可能である。前者のグループは、とりたて詞(T)とスコープ要素(X)に関するスコープ解釈が一義であるのに対し、後者のグループはスコープ解釈も基本的に二義性を持つ。このとき後者には「(ia)のパターンの方が(ib)のパターンに比べ広いスコープ解釈(T>X)をとりやすい」という一応の傾向性が存在する(cf. 佐野(1997))。ただし、この承接のパターンはスコープ解釈の可能性を完全に予測するものではなく、また、この承接の問題と本発表で用いたテストとが原理的なレベルでどのように関連付けられるのかについても、現段階では明らかではない。

本発表における指標に基づいて得られた階層は、先行研究における分析結果と多くの部分で重なるものである。今回は扱ったとりたて詞が少数に止まったが、とりたて詞全体の階層性を明示的に示すために同様の手法を拡張していくことができると考えられる。

また、ここで用いた指標は、先行研究で用いられてきた指標と一部関連付けられるものであった。この点で、本発表で行った記述は、今後この問題を一つのモデルによって統一的に扱うための手がかりとなると思われる。

【参考文献】

- 有田節子 (1999) 「テ八構文の二つの解釈について」『国語学』199
- 加賀信広 (1997) 「数量詞と部分否定」廣瀬幸生・加賀信広『日英語比較選書 4 指示と照応と否定』研究社出版
- 加藤泰彦 (1989) 「否定の作用域と文法表示」『上智大学外国語学部紀要』23
- 近藤泰弘 (1995) 「中古語の副助詞の階層性について - 現代語と比較して - 」益岡隆志・野田尚史・沼田善子(編)『日本語の主題と取り立て』くろしお出版
- 佐藤直人 (1996) 「「テ」で導かれる句の構造的な大きさと時称的解釈」『新潟大学国語国文学会誌』38, 新潟大学人文学部国語国文学会
- 佐藤直人 (1998) 「二つの」ナガラ節」平野日出征・中村捷(編)『言語の内在と外在』東北大学文学部
- 佐野真樹 (1997) 「副助詞ダケの LF 移動におけるターゲットについて」『立命館文学』551, 立命館大学人文学会
- 澤田治美 (1993) 『視点と主観性 - 日英語助動詞の分析 - 』ひつじ書房
- 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版
- 沼田善子 (1986) 「とりたて詞」奥津敬一郎・沼田善子・杉本武『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
- 沼田善子 (1989) 「とりたて詞とムード」仁田義雄・益岡隆志(編)『日本語のモダリティ』くろしお出版
- 沼田善子・徐建敏 (1995) 「とりたて詞「も」のフォーカスとスコープ」『日本語の主題と取り立て』くろしお出版
- 野田尚史 (1995) 「文の階層構造からみた主題ととりたて」『日本語の主題と取り立て』くろしお出版
- 長谷川信子 (1994) 「「も」と否定辞と論理形式」『言語』23-2, 大修館書店
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』大修館書店
- 南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
- 宮地朝子 (1999) 「「とりたて」形式の構文的特徴と意味機能 - とりたて詞と係助詞・副助詞 - 」名古屋・ことばのつどい編集委員会(編)『日本語論究 6 語彙と意味』和泉書院
- 由本陽子 (1997) 「動詞から動詞を作る」影山太郎・由本陽子『日英語比較選書 8 語形成と概念構造』研究社出版
- Aoyagi, Hiroshi (1999) On Association of Quantifier-like Particles with Focus in Japanese. *Linguistics: In Search of the Human Mind*, Muraki, M. and E. Iwamoto. (eds.), Kaitakusha.
- Koizumi, Masatoshi (1993) Modal Phrase and Adjuncts. *Japanese/Korean Linguistics 2*, Patricia M. Clancy (ed.), CSLI.
- Sano, Masaki (1999) Syntax of Modal Polarity of Adverbial Particles in Japanese. 筑波大学英語学会第20回記念大会講演会ハンドアウト(1999年10月30日, 於: 筑波大学)